

---

# まっさんが幻想入りシリーズ～鈍感咲夜とプリズムリバーとクリスマス。～

ソースケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まっさんが幻想入りシリーズ〜鈍感咲夜とプリズムリバーとクリスマス。〜

### 【Nコード】

N7675F

### 【作者名】

ソースケ

### 【あらすじ】

ひよんなことから、幻想郷の将棋指しのまっさんはプリズムリバーのクリスマス特別ライブチケットを手に入れた。それも、2枚。そうだ、それなら咲夜ちゃんでも誘ってみるか。ちょうど数日前、咲夜から紅魔館で行われるクリスマスパーティーのチケットももらっている。その時に、誘ってみるかな・・・。

## （前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人はお読みにならないほうがよろしいかと思います。

小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

あと、この作品は掲載中の私の作品『銀弾の射手から紅魔館の瀟洒なメイドへ』と『紅魔館のメイドの休日』

『をお読みになってから読んで頂くと、面白さが多少、アップするかもしれません。

というか、『紅魔館の・・・』を読まないで、登場する男のキャラに納得できないと思われますので（東方に男が登場するなんてゆるせん、という方は読まない方がよろしいかと存じます）、ぜひ一度お目通しください。

師走の寒さの中で、二人の男が、殺気を放ちながらお茶所の縁台で将棋を指していた。

一人はコートを着た、若い端正な顔立ちの男。

幻想郷にやってきて一年ほどの新参者で、将棋が強く、幻想郷の住民に将棋を教えたり、棋書を発行したりして生計を立てている。

本名は分らないが、幻想郷の住民からは『まつさん』などと呼ばれていた。

そのまつさんの対局相手は、人懐っこさを感じさせるものの、どこか堅気でない雰囲気を漂わせているどてらを着込んだ中年男だった。そして、焚き火に当たりながらそれを眺めているたくさんのギャラリィ。

時間がたつにつれ、片方からは諦めの雰囲気、もう片方からは余裕の雰囲気が感じられるようになって来た。

まもなく、諦めの雰囲気を発していたほうの男・・・中年男のほう・・・が、「・・・負けました」と頭を下げた。

「いや・・・本当に強いな。外の世界から将棋の強いヤツがやってきた、と聞いていたんだが、まさかこれほどとは思っていなかった」  
中年男は駒を投じながら、若い男の強さを認めた。

「俺もうわさであんたのことは聞いたことがあったんだが、ここまですで指せるとは思ってなかった。これぐらい強かったら、幻想郷じゃ敵なしだっただろう」

まつさんは一応対局相手をそう褒めたが、外の世界で将棋のプロになるために修行していた彼からすれば、それほど強いとは思わなかったというのが本音だった。

この中年男の棋力は、咲夜に角を引いていい勝負、ぐらいのものだろう。

それでも幻想郷の人間たちの中では、相当に強いのは間違いない。

ただろうが。

「・・・あんたが来るまえはな」

はあ・・・と負けた男のほうがため息をつく。

「さ。じゃあ出すもん出してもらおうか」

まつさんが対局相手に催促する。

この将棋は『真剣』だったのだ。

分かりやすく言うと、賭け将棋である。

まつさんは基本的に賭け将棋を自分から仕掛けることはなかったが、相手から真剣を望まれた場合は、わざわざ勝負を避けるようなことはしない。

基本的に将棋だけで生活している彼は、貧乏でもなかったが、決して裕福な生活をしているわけではない。  
落ちている金は、拾うことにしていた。

今まで5回ほど賭け将棋を挑まれているが、当然まつさんの全勝である。

幻想郷に来てから平手ハンデなしで負けたのは、すきま妖怪の八雲紫だけだった。

催促された中年男はしぶしぶ財布を懐から取り出し、紙幣を何枚か盤上に投げ出した。

「・・・足りないんだが」

出された紙幣を見て、顔をしかめるまつさん。

盤上に置かれている金額は、最初にこの男が提示してきた金額よりも、かなり少なかった。

「まさか負けるとは思ってなかったんで、持ってる金はそれだけだ。残りはこれで勘弁してくれ」

男は今度は財布とは別に、懐から2枚の紙切れを取り出して、紙幣の上にそれを置いた。

その紙切れには黒い下地に星をちりばめたイラストが描かれている。そして『プリズムリバー：クリスマス特別ライブ』の文字も。

「・・・なんだこりゃ？」

いきなり差し出されたチケットに、まっさんは怪訝な表情を隠せない。

「プリズムリバーのライブチケットだ」

「そのプリズムリバーってのはなんだ？」

「知らないのか？今結構人気のある幽霊楽団の名前だよ。クリスマスライブのチケット買うのに苦労したんだぜ」

「幽霊楽団・・・？」

まっさんは名前はあるが誰も存在しない、活動していない学校のクラブのようなものを思い浮かべた。

「もうチケットは売り切れてる上に人気のあるものだから、その辺のカップルにでも売れば賭け金以上にはなる。これで勘弁してくれ」  
そう懇願する中年男。

「人気の楽団のチケットね」

2枚か。

1枚なら借借書を書かせてでも現金にこだわるところだったが、2枚なら話は違ってくる。

「OK。ならこれで貸し借りはナシだ」

「助かるよ。アキちゃんにまた怒鳴られそうだが・・・」

「アキちゃん？おっさんの恋人かなんかか？」

「・・・まあ、そんなとこだ」

人のよさげな中年男はバツの悪そうに鼻頭をぽりぽりと掻いた。

「そりゃ気の毒に。じゃあ、俺は咲夜ちゃんでも誘うかな」

まっさんのその言葉に、驚く中年男。

「サクヤ？紅魔館の十六夜咲夜のことか？」

「そうだよ」

「あの紅魔館のメイドとどういう関係なんだよ、あんた」

「どんな関係、って言われても」

今度はまっさんが困って頭をかく番だった。

「友達っていうか、棋友っていうか。まあ、そんな関係だ。彼女も

将棋を指すからな」

「そうかい。あんたも怖いもの知らずだな……。後ろから得意って言われているナイフでぐさり、ってされたらどうするんだい？あのメイド、ご主人様の吸血鬼のために人間狩りしてる、ってうわさがあるぞ？」

「そりゃ刺される俺が悪い。世の中つてのは、常に騙されるほうが悪いのさ」

そう言っつて少し、自嘲気味の笑みを浮かべるまっさん。

そこで終わってれば、なんてことはなかった。

しかし、賭け将棋に負けた男は悔しかったのだろう。

「へえ。若いくせに達観してるね。しかし、人から巻き上げたチケットでオンナとデートかい。呵責は感じないのかね？」

なんてことを言い出す。

「……んだと？」

「汗水たらして働いた力ネで誘ってやりたい、つてのはせめてもの男心じゃないか？俺だってこんななりだが、そのチケットは綺麗な金で買ったチケットだ。その汚いチケットで……」

まっさんはすごい勢いで立ち上がると、男の胸倉をつかんで無理矢理立たせた。

「んぐっ……！」

「俺は勝負を挑まれて、正々堂々と将棋の技術であんたに勝った。勝った方は得る。負けたやつは失う。それが将棋の、いや、この世の真理だろ。そこに綺麗も汚いもあるか？ええ？あるのかって聞いてんだ！」

「……っ！つてえな！なに本気になつてんだよ！」

中年男も腕力では負けていなかったようで、胸倉を掴まれていたまっさんの手を無理に解く。

「ちっ、つまんねえ男だ。勝ったんだから謙虚でいてればいいものをよ。気分わりい。帰るわ」

がっつ！と縁台を蹴り飛ばして去っていく男。

飛び散った将棋の盤駒にはまるで無頓着だ。

はだは面白くない男の態度だったが、まっさんはそれ以上ケンカをするつもりはなかった。

まっさんは慈しむ様に、飛び散った盤駒を拾い始める。

「そうさ。負けたほうは失うんだ・・・」

なにもかも。

ギャラリーの視線が気になった彼は、かろうじて（俺みたいにな）という言葉を読み込んだ。

ギャラリーたちに聞いているうちにわかってきたのだが、プリズムリバー楽団というのはルナサ・プリズムリバー、メルラン・プリズムリバー、リリカ・プリズムリバーという3姉妹の騒霊が運営している楽団で、激しくノリのいい音楽が売りの、今幻想郷で人気のある楽団らしかった。

幽霊で3姉妹、というのもよく分からなかったが、『そういうものだ』とまっさんは納得することにした。

大体、幻想郷には『そういうものだ』で納得しておかないと、納得できないことが多すぎるのである。

「ライブの日は25日の午前2時からか・・・」

丑三つ時から開始とは。

さすが幽霊楽団だ、とまっさんは変に感心してしまった。

「そっいゃ・・・」

まっさんは思い出したように、財布から一枚のチケットを取り出した。

先ほど男から掛け金の代わりにもらったチケットとはまた違う、紅い色が下地の、派手なチケットだった。

そのチケットには金色の文字で『紅魔館クリスマススイーパーティ招待券 日時12月24日午後8時より 主催：レミリア・スカーレット』と書かれてある。

3日ほど前、将棋を教えたときに咲夜からもらったものだ。



ただ、異性をイベントに誘うときにありがちな、ちよつと照れたり  
はにかんだ雰囲気は咲夜にはまったくなく、『お嬢様があの面白い  
人間も誘ってやって、って言ってたから』といって手渡されたもの  
だった。

最近気づいたのであるが、あの咲夜という美少女、相当な朴念仁の  
ようである。

あれだけの美貌を誇っているのだから、迫る男は少なくないだろう。  
しかし、咲夜のあの調子では、振り向かせる、いや男のほうが好き意  
を持つていることを彼女に感じさせることすら大変だろうなあ、と  
まっさんは思う。

新参者のまっさんは知る由もないことだったが、あの『紅魔館のメ  
イド』に言い寄る勇氣のある男なぞ、幻想郷にはいなかったのであ  
るが。

「まあ、いいや」

とにかく、クリスマススイブとクリスマスは『友達・棋友』として咲  
夜を誘ってみよう。

彼は自分から女の子に仕掛けたことなんか、あまりない。

容姿端麗な彼には、女の子の方から言い寄って来ることのほうが多  
かったからである。

24日の午後8時30分。

まっさんは紅魔館の前に向かってぶらぶらと歩いていた。

奨励会員だったまっさんは将棋のイベントなどもわりとよく手伝い  
に行っていたが、こうしたイベントの最初はお偉い方の長くてつま  
らない挨拶、と相場が決まっているので、イベントやパーティは開  
始時刻に行かないのが最善手、と思っている。

まあ、あのレミリアが人間たちに向かって開会の挨拶をしている様  
は、どうにも想像が出来なかったが。

しばらく歩いて、ようやく紅魔館が見えてくる。

紅魔館の中からは華やかなクリスマスソングが聞こえ、電気もない

はずなのにどうしたものの、イルミネーションがきらきらと輝いて見えた。

「よ、リンちゃん。メリクリ」

まつさんはクリスマスだというのに相も変わらず門番家業に勤しんでいた紅　美鈴に挨拶した。

ただ、今日の美鈴は紅い帽子に紅い服の、クリスマス仕様門番だった。

「ああ、あなたは。メリークリスマス」

何度か紅魔館を訪れているまつさんは、もちろんこの門番とも顔見知りだった。

「せっかくのクリスマスなのに今日も門番かい。ご苦労なこったね」

「そうなんですよ。今日ぐらいご馳走食べてもバチ当たらない気はするんですけどね」

と、愚痴りだす美鈴。

咲夜からこの門番は妖怪だ、と聞いていたが、こういう所がどうにも人間臭く、親しみがわく。

「まあ、仕事だから仕方ないんですけどね。チケット拝見させてください」

「あいよ」

まつさんは懷から紅い紙を取り出し、それを美鈴に手渡す。

「はい、確かに。会場は庭になってます。では楽しんできてください」

そういつてまつさんを紅魔館に招き入れる美鈴は、ちょっと悲しそうな顔をしていたのだった。

まつさんが会場に足を踏み入れると、すでに相当数の人間や妖怪が酒を飲み、バイキング形式になっているご馳走に舌鼓を打っていた。紅魔館の屋上から1階までを使った豪勢なイルミネーションに、本物の楽団に演奏させているクリスマスソング。

外の世界でこれだけのパーティを催そうと思えば、相当な力ネが必要

要なはずだった。

（いつも疑問に思うんだが、ここの金回りってどうなってるんだろう・・・？）

あの小さな吸血鬼が鍬や斧を持って働いている様子はどうやっても想像できなかったし、紅魔館印のまんじゅうやせんべいなども見たことがないので、版權で食っているわけでもなさそうだ。

咲夜だったらどうにでも稼ぎそうだったが、彼女は館の仕事に忙殺されて、とても外で仕事をしてカネを稼ぐ時間なんて取れないだろう。

（咲夜ちゃんがお嬢様は運命を操れるから、とか言ってたけどなあ）  
まっさんは何気なく、シャンパンバイキングに置かれていたグラスを手にとって、シャンパンを口に含んでみた。

（げ。エノテークか、これ）  
ドンペリニヨン・エノテーク。

有名なドンペリの中でも、高級な位置に属するシャンパンである。  
仲間がプロになったとき、お祝いに将棋指しの先輩からこれを振舞われたことがあった。

まっさんもシャンパンやワインに詳しいわけではなかったが、あまりに清冽な味だったので、あれ以来飲んでいなかったにもかかわらず、舌が勝手に覚えていたようだ。

外の世界で買ったら1本3万円はくだらない代物である。

そのシャンパンがまるで、『ご自由にどうぞ』といわんばかりにグラスに注がれて、無造作にシャンパンバイキングに置かれているのだ。

（謎すぎる・・・）

考えていても精神衛生上よくなさそうだし、答えも出そうにない。  
まっさんはいつものように『そういうものだ』で納得することにした。

・・・どうにも今回は納得できそうにもなかったが。

まつさんは顔見知りの人間や妖怪（霊夢や魔理沙はもちろん、永琳や紫、幽々子や妖夢も招待されていた。みんなそれなりに正装してこのパーティにやってきているようだった）に挨拶したり挨拶されたりしながら、やたらとうまい料理に舌鼓を打ち、高級酒を味わいながら、咲夜の姿を探していた。

（お。いたいた）

咲夜は空になったバイキング料理の皿を下げ、新しく料理を追加している最中だった。

相変わらずのメイド服だったが、今日はカチューシャの代わりに紅い帽子をかぶっている。

「よ、咲夜ちゃん。メリクリ」

まつさんは後ろからとんとん、と肩を叩いて咲夜に呼びかけた。

「？」

咲夜が怪訝顔で振り向く。

「ああ、メリークリスマス」

知った顔で安心したのか、咲夜はガーターリングの辺りに伸びていた左手を通常の作業に戻した。

「しかし、今日の料理はやたらうまいなあ。どこのレストランに注文したんだい」

まつさんは咲夜が新しく持ってきて盛り付けしたローストビーフを、早速自分の皿に取り分けて口に運ぶ。

「いや、今日の料理はここで作っているのよ」

「へえ、そりゃすごい。腕っこきの料理人がいるんだな」

「あ・・・いや」

咲夜は珍しく照れたような表情を浮かべて、

「量が多いから妖精メイドにももちろん、手伝わせたけど・・・主な調理とレシピは私が担当したの」

と、説明した。

「これ全部・・・？咲夜ちゃんが？」

「ええ」

「はぁ・・・」

驚きの声を上げるまつさん。

見渡しただけでも今皿に乗っているローストビーフに、ローストチキン、ミートローフ、トマトで煮たハンバーグ、酢豚、牛肉のワイン煮、サーモンマリネ、ロールキャベツ、いもの煮っ転がし、コーンスープにみそ汁。

デザートも切り分けたさまざまなフルーツから、プロの洋菓子職人も裸足で逃げ出す出来の一口ケーキを十数種類。

和洋中にデザート、何でもござれのすご腕である。

「もういつそメイドなんて辞めて、料理人にでもなったらどうだ？ そっちのほうが儲かりそうだし、あのちび吸血鬼どもの相手も疲れるだろ？」

ローストビーフを味わいながら、冗談めかして言うまつさんに咲夜は、

「あんまり興味ないかな。料理人になったら、料理しか仕事でなくなるし。それに、そのちび吸血鬼の相手が楽しいのよ、私」と、こちらも冗談っぽく答える。

「なるほどなあ」

「・・・いい女だなあ。」

「もつとも5時間以上包丁振るい続けで、さすがに疲れたわ。料理のほうもひと段落したし、少し休憩をもらうことにするわね。今日は楽しんでいてね」

空いた大皿をお盆に乗せて、ひらひらと手を振って去っていくとする咲夜。

そんな時、楽団の演奏する音楽がクリスマスソングからワルツへと切り替わった。

外の世界では聞いたことがなかったが、優雅で上品なダンスワルツ。料理を楽しんでいた人や妖怪たちが、皿をテーブルに置き、近くの異性の手を取って、リズムに合わせて踊り始める。

「ああ、待った。咲夜ちゃん」

そんな周りの様子を見て、まっさんが咲夜を呼び止めた。

「どうしたの？」

「ああ・・・その。なんだ」

まっさんの視線が泳ぐ。

「何か料理に不備でもあったかしら？」

怪訝な表情をする咲夜。

「いや、料理はめっちゃうまかった。その・・・どうしても休まないダメなぐらい、今疲れてるか？」

「・・・？いえ、そんなことはないけど」

「それなら、俺のダンスの相手になってくれ」

まっさんはおずおずと、少し震えた手を咲夜に差し出した。

どうしても勝ちたい将棋で、勝ちが見えたときに指し手が震えることは何度かあったが、女の子に手を差し出して震えた経験は、初めてだった。

今までの彼にとって、女の子とは、真剣勝負する必要のない相手だったから。

「ダンス？私と？」

驚きと呆れが混じった咲夜の表情。

「あ・・・俺じゃ咲夜ちゃんの相手として、役者不足かい？」

「いえ、光栄だとは思っけど」

本音か社交辞令か、咲夜はそう言っただけで自分の服装を指差した。

「仕事着だし。あなたに対して失礼だわ」

「それなら俺も大して変わらないよ。コートの下は冬物の着物だし」

まあ、相手がそういうなら、かまわないか。

踊るのは苦手でも、嫌いでもない。

「そうおっしゃるならお相手させていただきますわ」

咲夜は冗談っぽくそう言って、差し出されたまっさんの手をとった。

「・・・メチャメチャうまいな、咲夜ちゃん」

咲夜を抱いて踊っていたまっさんは、咲夜とのあまりのダンステクニクの違いに穴があつたら入りたい思いに駆られた。

将棋で言ったら、6枚落ちから8枚落ちぐらい実力が違う。

俗に言う『段チ』というやつだ。

見る人が見たなら、明らかに男性のまっさんが女性の咲夜にリードされているのが丸わかりだろう。

「うんまあ、社交ダンスは小さいころに習っていたから」

まっさんの耳元でそうささやき、ワルツに合わせて流れるように舞う咲夜。

ダンスの基礎を少し先輩に教わっただけのまっさんは、ついていくのがやっとだった。

（しかし・・・咲夜ちゃんって、どういった生まれ育ちの女の子なんだろう・・・）

瀟洒で美麗で、ナイフ投げから弾幕、料理チエス将棋ダンスまでこなして、あの八意永琳とも浅からぬ関係がある。

どう考えても、ただの美少女メイドというわけではあるまい。

この瀟洒な美少女は、自分には及びもつかない過去を抱えているのではないだろうか。

（知りたい）

この少女のことを、もっと。

外の世界にいるとき、彼は女の子のことを『浅いものだ』と思い込んでいた。

彼女たちのことを、何も知る必要はない。

彼女たちが男性に求めているものは、端麗な容姿か、お金だけだと思っ込んでいた。

もっと言うなら、好きも嫌いも関係ない。

その二つのみが、彼女たちにとって重要だったのだ、と。

こちらも目的ははっきりしているの、むしろそうだった女の子た

ちのほう扱いやすかったということもある。

事実、その二つがあれば男女交際に関して、彼は何も困ることが無かった。

逆に言えば、それらがないと男女交際は成り立たないものだと思うていたのである。

彼がお金（彼は将棋の名人を目指していたので、将来性というべきか）というものを失った時点で、彼の恋人はあっさり彼の元を去った。

『オナナなんてそんなもの』という思いは、いつそう彼の中で強くなった。

しかし幻想郷に来て、その思い込みは崩れ去りつつあった。

少なくとも、この幻想郷で彼の惹かれた女の子たちは、その二つではどうしても越えられない壁を感じることが多々ある。

それは彼にとつてシヨックでもあり、福音でもあった。

そろそろワルツも、終わりが近いらしい。

三々五々踊っていた人間や妖怪たちも、異性の手を離し、一礼して名残惜しげに、あるいはあっさりと距離をとり始める。

「そろそろ、終わりね」

咲夜もそつと、まっさんから離れようとした。

しかし、そんな咲夜の細腕をまっさんはがっしりと掴んだ。

「・・・？どうしたの？」

「あ・・・あゝ。いや」

本当だ。どうしたのだろう。

しかし彼は、ここであっさり咲夜と距離をとると、もう二度と咲夜は自分の近くに居てくれないのではないか、という根拠のない不安に駆られたのだ。

「その、なんだ。このあとの予定は？」

「そうね・・・。パーティは12時までだし、まだ仕事が残っているわ。後片付けもあるし」



腕をきつく掴まれたことに困惑しながらも、咲夜はそう答える。

「実は今日は、これに咲夜ちゃんを誘おうと思って、パーティに来ただ」

まつさんはとりあえず咲夜の細い腕から手を離して、懐から財布を取り出し例のチケットを2枚そこから抜き出した。

そして、一枚それを咲夜に手渡す。

「プリズムリバークリスマス特別ライブ・・・？」

「ああ。時間、取れないか？」

なぜ自分はこうも、ドキドキしているのだろう。

外の世界でもあったように、遊びたい女の子を、デートに誘っているだけなのに。

昇級のかかった、絶対に勝たねばならない将棋を指そう、というわけでもないのに。

「2時からか・・・。後片付けがあるから、ちょっと無理かな。ほかの人を誘ってあげたらどうかしら？」

さして残念そうな顔もせず、咲夜はそういつてあっさりとチケットをまつさんに返そうとする。

「え・・・？ああ。そうか」

あ。俺、断られたのか。

顔がかつと熱くなり、全身に微弱な電気が走りぬけたような感覚に陥る。

なんだ、この現実感のなさ。

彼だつて女の子を誘って断られたことがないわけじゃない。

しかし、誘いを断られてショックを受ける、なんてことはなかった。そのときはまた、別の女の子を誘うだけの話だったから。

彼は誘いを断られて、ショックを受けている自分がショックだったのだ。

震える手で咲夜からチケットを返してもらおうとするが、うまく受け取れずにチケットが地面に落ちてしまう。

「どうしたの？寒いの？酔ってる？」

咲夜が落ちたチケットを先に拾い、今度はまつさんの手の中にそれを握らせた。

まつさんにとってそれはまるで、死の切符を渡されたように感じられた。

「じゃあ、私は仕事があるからこれで。ダンスのお相手ありがとう」  
咲夜はそういつて、気品あふれる一礼をまつさんに寄越した。

そして、あっさり去っていこうとする。

「ああ」

こんな時、どうすれば良いかまつさんには分からなかった。

彼は猛烈に、彼女を引き止めたいと思っている。

失恋の痛みを知っていたり、少しでも男としての謙虚さを知っている男性なら、去っていこうとする咲夜を引き止めるために、何らかのアクションを起こした、いや、起こせたことだろう。

しかし、恵まれすぎた彼の男女観では、そのような発想は出てこない。

今までなら、いくらでも代わりがいたからだ。

でも、咲夜ちゃんは……。

崩壊していく自陣の穴熊を見つめるような眼で、咲夜を見送っていたときだった。

「待ちなさい、咲夜」

まつさんの後ろから、甲高い、そのクセに威圧感のある声。

その声に、まつさんと仕事に戻ろうとしていた咲夜が振り返る。

「レミイ？」

「お嬢様？」

二人が確認したその先には、今日のパーティの主催であり、この紅魔館の主、レミリア・スカーレットが偉そうに仁王立ちしていた。

レミリアの今日の服装はいつもの薄いピンクのドレスとは違い、真っ赤なパーティ用のドレスで着飾っていた。

「レミイ、ってあんたね……。まあもう、あんたに注意しても仕方ないのは知ってるけど。咲夜、後片付けは妖精メイドに任せて、

この男に付き合っただけなさい」

レミリアの思わぬ申し出に、顔を見合わせる二人。

「いや、俺も無理に、とは言わんし。仕事があるなら仕方ないだろ」

「お嬢様。お言葉ですが妖精メイドだけでは、今日の後片付けは朝までかかっても・・・」

「だまらっしゃい！」

こんなところで發揮しても仕方ない気がするのだが、その声を上げるレミリアには、カリスマがあふれ出ていた。

「なら今から片付けられるだけ片付けて、それで今日は上がっていいから、出かける準備をして来なさい。反論は許さないわ」

レミリアにそうまで言われたら仕方ない。

「・・・かしこまりました、お嬢様」

咲夜はそう返事して、紅魔館のほうへと歩き出す。

咲夜の姿が完全に見えなくなったのを確認してから、レミリアはまっすぐに、

「・・・これで貸し借りなし、ってことよ」

と、得意げな笑みを浮かべてそういった。

「あ・・・まあ。ありがとうよ。礼を言っておくよ」

「まったく、だらしないわねえ。この私にあれだけの啖呵を切る勇氣があつて、女の子一人誘う勇氣もないわけ？」

以前まっさんは咲夜の雇用状況に関して、雇い主のレミリアに噛み付いたことがあるのだ。

「いや、面目ない。昔から本当に勝ちたい将棋は、慎重に行つてしまっくセがあつてね」

「そのたとえばよく分からないけど・・・私はあなたにチャンスをおあげたわ。あとは、あなたしだいね。まあ、あの子は仕事は出来ても、そっちの方面はほんと無頓着だから、苦戦するでしょうけどね。言っておくけど」

レミリアは以前まっさんにされたように、彼の胸元を掴んで、キスできるぐらいの距離に彼の顔を自分の顔に近づける。

「咲夜を泣かして御覧なさい。フランと一緒に、干からびるまであなたを血をすべて吸い上げてくれるわ」

レミリアの言葉にまつさんは彼女の目をまつすぐに見据え、  
「わかつている」

とだけ一言、真剣な表情で答えを返したのだった。

午前0時。

楽団は『We Wish You A Merry Christmas』をスローテンポで奏で始める。

楽しかったパーティも、これでおしまいだ。

レミリアはああ言ったものの、結局咲夜は『妖精メイドだけに任せておく』と後が大変だから、時間いっぱいまで片付けておく』と言って、あの後仕事に戻ってしまった。

咲夜のいなくなったあと、まつさんはできるだけ酒を飲まないようにしながら、専ら食事のほうを楽しみ、顔見知りの将棋の生徒やイベントで知り合った人間や妖怪たちとの歓談にいそしんだ。

パーティが終わってから咲夜を待っている間、まつさんは門番の美鈴と雑談を交わしていた。

寒い。

パーティで中庭に居るときは、寒さなんて感じなかったのに。

その疑問を先ほど美鈴に聞いてみたのだが、パーティの間はわき巫女が暖房代わりになる結界を紅魔館全体に貼っていた（もちろん有償で）ので寒くなかったのだろう、という話だった。

ちなみに雑談の内容だが、ほとんどが美鈴の仕事に対する愚痴であつた。

「そうなんですよ。わき巫女には撃墜されるわ、メイド長には怒られるわ。たまりませんよ、まったく」

「・・・そんなに大変なら、転職でもしたらどうだ？」

まつさんが至極まっとうなことを言うと、美鈴なぜかあわてて、

「いえね！？やりがいがないわけでもないし、人間関係も悪いわけじゃないんですよ。ただ、少し大変だな、と思うだけで」  
と弁明する。

人間関係って。

あんた、別に人間じゃないだろ。

美鈴としやべつていると、外の世界にいるときに付き合っていたOLの元カノを思い出す。

彼女も仕事の愚痴を延々ともらしながら、次の日には何もなかったかのように会社に出かけていくのだ。

まあ、働く女、なんてのはそんなものかもしれない。

「俺にはその大変さがわからんが、まあ、がんばりなよ。そのうちいいことがあるさ」

この手の女性に下手にアドバイスや知ったかぶりをしても、痛い目に遭うだけなのはよく知っているので、まつさんはいつもそうやってかわすことにしていた。

彼女たちはアドバイスや解決方法を求めているわけではなく、ただ、愚痴を聞いてほしいだけなのである。

外の世界にいるときはそんな女性を『うざってえな』と思っていたときもあつたが、美鈴とこう話していると、なぜか懐かしさを感じた。

「そうですね、がんばります……。あ、メイド長が来ましたよ」  
美鈴の言うとおり、館からコートを着た咲夜が出てきた。

何の変哲もない、茶色のコートである。

「お待たせ。行きましようか。美鈴、今日はもう上がっていいわ。お疲れ様」

咲夜にそういわれると美鈴は、「はい、お疲れ様でした。メイド長も気をつけてお出かけください」といって館へと入っていった。

「愚痴は多いが、しっかりした子だな」

まつさんがそんな感想を漏らすと、咲夜は

「門番としてはちよっと、頼りないんだけどね。あっさり霊夢やら

魔理沙やらにやられて紅魔館に入れちゃうし。いやまあ、私も負け  
たから、偉そうに美鈴のことも言えないけどね」  
なんてことを言う。

「いろいろあったんだな・・・」

俺の知らないことが。

大体、俺が咲夜ちゃんに対して知っていることが、どれだけあるの  
だろう。

「あ、そうそう。はい」

咲夜はコートから一枚のはがきサイズの紙を取り出し、それをまっ  
さんに手渡した。

「これは？」

咲夜の手の中にあるそのカードをまじまじと見つめるまっさん。

「クリスマスカードよ。メリークリスマス」

「ああ、なるほど・・・。ありがとう。メリークリスマス」

クリスマスカードにいい思い出がないまっさんは、苦笑を浮かべて  
それを受け取るうとする。

受け取るうとして、咲夜の手に触れたときに気がついた。

「咲夜ちゃん。手、あかぎれだらけじゃないか」

ダンスのときは緊張していたためか、まったく気がつかなかったが、  
咲夜の白い指先は冬場の冷たい水仕事のために、あかぎれでささく  
れていた。

「ん？ああ・・・冬場はいつもこうなの。ちよつと痛いけど、慣れ  
てくるわ」

「慣れてくるわ、じゃねえよ。将棋指しは指先が命なのに」

「え？いや、別に、私は将棋指しじゃないし」

「いいから。ちよつと待ってろ」

まっさんはポケットから小さな容器を取り出し、ふたを開けて白い  
薬を指先に塗りつけた。

指先を綺麗を見せる、というのは将棋指しとして最低限のマナーと  
されている。

だからまつさんの指先はつめも綺麗に切りそろえられて、いつも美しかった。

男性に使うのはおかしいのかもしれないが、そんなまつさんの指先はまさに『白魚のような』指先だ。

少々高くついても、幻想郷で手に入る最高級のハンドクリームを永遠亭から売りに来る兎から必ず購入して、指先を手入れしているからである。

まつさんは手のひらに薬をなじませ、咲夜の細い指一本一本に、丁寧に薬を塗りつけていく。

左手の小指までしっかりと塗り終わって、薬を容器ごと咲夜のポケットに突っ込んでやった。

「あ・・・」

「これでよし。せっかく綺麗な指してるんだから、ちゃんと手入れしないと。その薬はやるから、それでしっかりと手入れしなよ」

「でも・・・悪いわ」

「悪くない。薬がなくなったら俺に言え。それぐらいなら買ってやるから。必ず手入れするんだぞ」

「うん、ありがとう。でも買ってもらうのは申し訳ないから・・・」

「それなら俺が買っておいてやるから、あとで代金をくれ。それならいいだろ？」

あかぎれぐらい放っておいても何てことない、と思った咲夜だったが、彼が真剣に言ってくれているのを察してか、

「そうね。それならお願いするわ」

と、笑みを浮かべてお願いしておいた。

紅魔館からライブ会場の博麗神社までおよそ1時間ほど。

なぜか彼らは無言のまま、その道のりを歩いていた。

いつもなら、将棋や囲碁の話、仕事の話なんかをすることが多いのだが。

二人の会話はたいてい、まつさんから話を振ってきて、それに咲夜

が相槌を打つパターンが多い。

でも、なぜかまっさんは黙って歩き続けている。  
だから咲夜も、黙ってまっさんの隣を歩いていた。

博麗神社が近づくにつれて、まっさんたちと同じようなカップルに遭遇することが多くなってきた。

カップルは腕を組みあい、仲睦まじげに寒い中を歩いている。

二人とも手をコートのポケットに突っ込んで歩いている男女のペアは、まっさんと咲夜ぐらいのものだった。

「なんか、恋人同士が多いみたいね」

表情も変えずに、あっさり言う咲夜。

「・・・なんてトーヘンボクな感想だろう。」

「俺たちもきつと、そう見られているぞ」

「そーかもね」

「・・・」

なんだ、俺、嫌われているのか？

それならまず、一緒にこないと思うのだが。

本当は来たくなかったが、レミリアにああいわれたものだから、仕方なく俺に付き合ってるだけなのか・・・？

でもそれほど嫌そうではないし、咲夜の表情を見る限り、むしろ今の状況を楽しんでいるようにも見える。

わからん。

この美少女は本当に読みきれん。

「・・・まあ、そこに惹かれてるのは、確かだったが。」

「もうすぐ開演時間だ。入ろう」

まっさんはそういつて、一枚チケットを咲夜に手渡す。

「ああ、そうだ。チケットの代金は・・・」

この子は。仕方ないヤツだ。

「冗談言つなよ。俺から誘ったんだし。さ、行こう」

「うん・・・」



咲夜は腑に落ちない顔をしながらも、まっさんの後に続いた。  
今度お返しをすれば、借りを作らなくて済むだろう。

ライブ会場は以前ミスコンが行われた境内だった。

チケット制のライブだったが、チケットによって厳密に見る場所が決められているわけではなく、『よい場所で見たら早めに来なさい』的な、ストリートライブに近い形のような。

まっさんたちが神社の入り口でチケットをもぎりに渡し、プログラムを受け取って会場に入ったのは午前1時50分ほどだったが、もう境内は人があふれんばかりになっていた。

「・・・いっぱいね」

「そうだな。こんなに混むもんだ、と分かっていたら俺だけ先に来て場所取りしておいたのになあ」

「でもそれだと、意味なくなるんじゃない？」

「え・・・？」

（だって、二人でこないと、意味がないじゃない・・・）  
のようなものを、わずかでも期待した自分が馬鹿だった。

「こんなに人がいるんですもの。きつとはぐれてしまつて会えない確率のほうが高いわ。それに、男女のペアばかりのところに一人が入っていったら、目立って仕方ないじゃない」

「・・・まっただ」

苦笑するしかないまっさん。

「まあ、目立ちたくないつても分からんでもないけどな。そうでなくても咲夜ちゃんは有名人だし、前回のミス幻想郷だし、誰か一人に気づかれると、大変なんじゃないか？」

今は誰も、咲夜の存在の気づいていないようだが。

少なくとも、外の世界ではそうだ。

将棋の名人が『有名になつていいことは、すし屋でいいネタが出てくることぐらい』と言っていた、というのを聞いたことがある。

つまり、有名になつていいことは何一つない、とこの名人は言いた

かったのだ。

「？何で大変なの？」

「いや。あの十六夜咲夜だ！みたいな感じで、みんな騒がないのかな、って」

「・・・？」

咲夜はまっさんの質問の意図が、まったく分からないしかった。

「・・・ひよつとしてここじゃ有名人を見て騒ぐ、っていう習慣がないのか？」

「・・・？ああ、そういうこと。だって、誰でも知っている人を見ても珍しくもなんともないから、騒いだって仕方ないでしょうよ」  
そう解説する咲夜。

「そ・・・そういう考え方なのか・・・」

いわれて見れば、周りの何人かはこちらに興味ありげな視線を送っている。

おそらく、あの十六夜咲夜がいる、と気づいているのだろう。

しかし、騒ぎ出すような雰囲気は、微塵も感じられない。

「うゝむ・・・」

幻想郷の住民は成熟しているのか、白けているのか。

まあでも、お隣の国からアイドルがやってくる、というだけで失神するような人間よりかは幻想郷の人間たちのほうが、よっぽど大人なように感じた。

まっさんがそんなことを考えていると、『ぼーん！』という爆発音が、舞台の方から響き渡ってきた。

その爆発音とともに、ロック調のクリスマスソングが鳴り響く。  
どうやら、ライブが始まったらしかった。

ロック調のクリスマスソングは『ハッピークリスマス』だった。  
聞き覚えのある曲でも、ジャンルが違えばまた新しい一面を垣間見ることが出来る。

その一曲が終わると、トランペットを吹いていた少女が、突如大声

を張り上げた。

「みんな〜！今日は私たちのライブに集まってくれて、ありがとう〜！」

少女の叫びに、観衆がおおー！ともきゃー！ともつかない歓声で答える。

「もうみんな知ってるかもだけど、プリズムリバーのメンバーを紹介するね〜！」

彼女は自分はメルラン・プリズムリバーだと名乗り、使っているトランペットは多くのジャズトランペッターの生き血を吸ってきた、恐怖のトランペットの幽霊だと紹介する。

「・・・なあ、咲夜ちゃん。トランペットって幽霊になるのか？そもそも、どうやって血を吸うんだ？トランペットに採血用の注射器でもつけてるのかい」

素朴な疑問を呈するまつさん。

「私に聞かれても。でも、本人が言っているんだから、そうなんじゃないの？それに、いつもああいいう口上でライブが始まるのよ」

「・・・。そーなのかー」

どこかの妖精の口真似をして、とりあえず納得した振りをしておくまつさんだった。

次に、バイオリニストの紹介。

バイオリニストの名前はルナサ・プリズムリバーといい、彼女が使用するバイオリンはストラディバリウスも裸足で逃げ出すほどの名器の幽霊らしかった。

「・・・俺は楽器にそう明るいわけでもないんだが、ストラディバリウスってのは最高級のバイオリンなんだろ？それ以上のバイオリンの幽霊ってなんだ？まあ、音色の好みとか同じストラディバリウスにも色々あるんだろうけど」

「私に聞かれても」

少し困った顔をする咲夜。

「……まあ、そりゃそうだ」

咲夜に分からないのなら、まっさんとしてもお手上げである。

最後に紹介されたのは、一番小さな少女だった。

名前をリリカ・プリズムリバーといい、キーボードを担当しているらしい。

そのキーボードは音が独特すぎて売れなくて幻と消えた、不遇のシンセサイザーの幽霊らしかった。

まっさんが咲夜に視線を向ける。

「……私に聞かれても」

先手を打たれてしまった。

「……そうだよなあ……」

彼はJ・POPからクラシックまで、何度かライブに足を運んだことがあるが、これほど謎に満ちたライブに遭遇したのは初めてであった。

（これでちゃんとした音楽が聴けるのかよ……さっきの演奏はよかったけどさ）

一抹の不安に駆られるまっさんだった。

演奏された曲は、すべて昔からあるクラシカルなクリスマスソングで、それをノリのいいロック調やジャズ調にアレンジしたもののばかりだった。

聞き覚えがあるはずなのに、新しさを感じさせる演奏。

そして人間が普通に演奏する楽器では決して聴くことの出来ない、独特のメロディ。

その演奏に周りも大盛り上がりだったし、まっさんも騒ぎこそしなかったものの、

（いい演奏聴かせるじゃないか）

と、感心しながら聴いていた。

咲夜も腕を組み、足でリズムを取りながら、機嫌よさげにプリズムリバーの演奏を楽しんでいるようだった。

「咲夜ちゃん。こういう音楽も、悪くないね」

周りの騒音に負けないよう、まつさんは少し声を張り上げて咲夜に言う。

「そうね。お嬢様もプリズムリバーの演奏が好きで、たまに館に呼んで演奏させるのよ」

「へえ・・・」

あのちび吸血鬼に音楽を聴く趣味があつたとは。

「咲夜ちゃんはどんな音楽が好きなんだい？」

まつさんは興味に駆られて、そんなことを聞いてみる。すると咲夜は少し遠い目をして、

「嫌いな音楽なんてないわ。音楽はすべからく、美しいものだものと、答えた。

「・・・そうか。そうかもしれないな」

咲夜は素直な感性の持ち主なのだろう、とまつさんは感じた。

それでないと、先ほどのような答えは出てこないだろう。

そんな会話を交わしているうちに、ジャズ調の『きよしこの夜』の演奏が終わる。

「みんな～！いままで演奏聴いてくれてありがとう～！名残惜しいけど、次が最後の一曲だよっ！」

トランペッターの少女が、そう叫ぶ。

ええっ！と残念そうな声が観客から上がるが、『きよしこの夜』がラス前の演奏というのはプログラムに書いてあったので、一種の演出みたいなものだった。

「クリスマスが終われば、すぐに大晦日！そして新年！今年も無事に終われる喜び、そして新年を迎えられる喜びをみんなで歌いましょう！ラストは『ベートーヴェン交響曲第9番より歓喜の歌』！歌詞の分からない人はプログラムの裏をみることに！」

メルランがそう言い放ち終わると、先ほどとは違って変わり、荘厳なメロディが彼女たちの楽器から奏でられはじめる。

観客のほとんどが、ドイツ語の第九なんて、歌った経験がないであろう。

それでもただとしくも微笑ましく、恋人同士肩を寄せ合って歌いられないドイツ語で『歡喜の歌』を口ずさみ始める。

・・・まつさんの隣にいた一人の少女を除いて。

「Freude, sch&ump;ouml;ner G&amp;p;ouml;ttterfunken, Tochter aus Elysium, Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum  
!」

（喜びよ、美しい神々の閃光よ 楽園の世界の娘よ 私たちは足を踏み入れる、炎に酔いしれつつ天なるものよ、あなたの聖所へと）

咲夜だった。

水晶のように透き通った、美しい声。

完璧なドイツ語の発音。

完璧な歌唱。

「だれ？」

「一番後ろのほうから聞こえる・・・女の声だ」

「あの銀髪の娘かしら・・・？」

「・・・十六夜咲夜か？」

咲夜が歌い始めてすぐは、さすがにざわついた。

「ちょ・・・。咲夜ちゃん、むっちゃ目立ってるって。いいのかよ!？」

まつさんがそなたしなめるが・・・

「Deine Zaubere binden wieder, Was  
s die Mysterien geteilt, Alle  
Menschen werden Br&uuml;d  
er, Wo dein sanfter Fl&uuml;  
gel weilt.»

（あなたの魔法の力は再び結びつける 世の中の時流が厳しく分け  
隔てていたものを 全てのひとは兄弟になるのだ あなたのその柔  
らかな翼が憩うところで）

咲夜は気にもとめず、美しい歌声を境内に響き渡らせる。

その歌声には、『あわせてみたい』と思わせる、不思議な魔力があ  
った。

そしてその歌声は、歌いられない観客の柱に成り得る力があつた。

観客たちはざわつくの止め、みな声を合わし始める。

咲夜の歌声が中心核となり、曲が中盤を越えるころには、観客たち  
の歌声とプリズムリバーの奏でる交響曲は、見事ひとつになつてい  
た。

「Such ihn &uuml;berm Stern  
enzelt!&uuml;Uml;ber Sternem  
u&uuml;szlig; er wohnen.»

（彼を星の輝く天幕の彼方に探せ！星の彼方に彼はいるに違いない）

第九が、終わった。

歌声も演奏も、一瞬、止む。  
そして。

『わああああっ！』

大歓声と、大きな拍手。  
中には、カップルで涙ぐみ、お互いを抱きしめあっているものもある。

ケチのつけようのない、大団円だ。

そのような中で咲夜は、酷使したのどを休めるかのように、静かに浅い呼吸を繰り返していた。

ライブが終わり、カップルたちはみなお互いの存在を確かめ合うように寄り添って、続々と会場をあとにしていく。

まつさんと咲夜も、もちろんその中に混じっていた。

しかし、二人は周りのカップルのように、腕を組みあっているわけでもなかったが。

「驚いたね。何でも出来るんだねえ、咲夜ちゃんは」

咲夜の歌声に聞きほれて合唱していなかったまつさんは、素直に感嘆の声を上げた。

「まあ、たまたま『歓喜の歌』だったから。小さいころから好きで、町の合唱団とかに参加していたこともあったし」

「町の、ね」

どこの町なんだか。

まつさんは改めて、咲夜の美しい容貌をまじまじと確認してみる。

緩やかに波打ったプラチナブロンドの髪。

透き通るように白い肌。

筋の通った高い鼻。

小さな薄いくちびる。

大きなグレイの色の瞳はパッチリとした二重で、睫毛がとても長い。化粧っ気はまるでなかったが、咲夜ほどの美貌の持ち主だったら、



むしろ化粧はその品位を落とすだけのものなのかもしれない。

（日本人じゃないよな・・・明らかに）

日本語のイントネーションは完璧に聞こえるが。

ひよつとしたら咲夜は別の国の言葉をしゃべっていて、この幻想郷が日本語に通訳してくれているのではないか。

まっさんは明らかに日本人離れた人間や人間離れた妖怪と話をするたびに、そんな思いに取り付かれることがある。

「じゃあ、咲夜ちゃん。紅魔館まで送るわ」

まっさんはそう申し出るが、咲夜に

「いいわよ。ここから紅魔館に行ってまた里まで帰ってくるってなったら、相当時間かかるし」

と、すげなく断られてしまった。

「ん・・・あゝ、そうかい。一人で大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫。むしろ私はあなたのほうが妖怪に襲われないか、

心配だわ。まあ、博麗神社のイベントの帰りは大丈夫だと思うんだけどね。もし襲ったら霊夢が黙ってないでしょうし。『うちのお客さんに手を出しやがって！』って」

「どこの侠客だ、それは」

「そのキョウカク、つてのが何かはわからないけど・・・。今日はライブのお誘いありがとうね」

「いや。こっちこそ無理に誘ったみたいで、すまんかったな」

ぽりぽり頭をかくまっさん。

照れたときの、小さいころからのクセだった。

「いえいえ、楽しかったわ。じゃあ、今夜はこれで。おやすみなさい」

丁寧な礼をして、手をひらひら振りながら帰っていかうとする咲夜。

（・・・このまま帰して、いいのか？）

自問するまつさん。

ほら、チャンスだ。

勝負手放つなら、ここしかないだろ。

「待った、咲夜ちゃん！」

「？」

怪訝な顔して振り返る咲夜。

「どうしたの？」

「んゝ・・・いや、なんというか」

ほら、いつものノリはどうした。

「あゝ。いや。その。また遊んでくれるか？」

「？ええ、もちろん。仕事が休みのときは、また将棋を教わりに行くわ」

「そうか、うん。待ってるよ」

「それだけ？」

「・・・ああ」

「そう。それじゃ、また会いましょう」

そう挨拶して、去っていく咲夜。

彼女の背中が、小さくなっていく。

・・・俺ってどうして、こう・・・絶対勝ちたい将棋は手堅くいつちまうんだ。

それでうまくいったためしなんて、ないのに。

踏み込まなきゃ勝てないって、いやというほど知っているのに。

まつさんは師走の、まだ暗い午前5時の空を見上げて、

『ばかやろっ！』

と叫んだ。

誰に向かったの罵倒だったのか。

暗い夜空に向かったの罵倒だったのか。

クリスマスに向かったの罵倒だったのか。

ふがない自分への罵倒だったのか。

それとも逆切れ気味に、あまりに鈍感でトウヘンボクな、咲夜への罵倒だったのか。

それを知っているのは、純情な幻想郷の将棋指しだけだった。

(終)

## （後書き）

長文読破、お疲れ様でした。

文字数だけでいえばほとんど『私の胸はPADじゃない！』の全話と同じ長さになるので、本当にお疲れになったと思います。

書き終わって読み直してまず思ったことは、『どこのギャルゲ展開だ』ということです。

それに、昨今流行の携帯小説などと比べると、私の話には輪姦もレイプも妊娠もリストカットも出てこないの、『話がきれいすぎる』という批判を受けてしまうかもしれませんね。

でも殺伐とした世の中、ひとつくらい綺麗な話があってもいい、と私は考えています。

まあしかし、リアルでなら、普通あそこまで露骨に好意を示せば、何らかのアクションが帰ってきますよね。そこで恋愛（両思い）に発展しないのが、書いていて実にギャルゲ臭く感じましたね。

でも、私のSSの咲夜は徹底してトーヘンボクで鈍感です。

くつついちまったら終わってしまふ、というメタな話もありますが、咲夜がああなのは、ちゃんとその理由を考えてあります。

フルメタとか読んでいらっしゃる方なら、もったいぶらずとももうバレバレだと思うのですが。

でも、クリスマスにアップできてよかったです。

本当はイブに上げてしまいたかったのですが、色々書き連ねているうちに長くなってしまっただけ……。

自分で言うのもなんですが、今作は労作でした。  
少しでも皆様が私のSSを読んで楽しんでいただけたのなら、これに勝る喜びはありません。

では、次回作でお会いしましょう。

この作品は東方プロジェクトの非公式二次創作小説です。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弹幕型格闘ゲーム（？）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。  
こちらもぜひ、プレイしてみてください。

本文の第九の歌詞及び和訳は、こちらのサイト様を参考にさせていただきました。

サイト名：第九の歌詞と音楽

URL：http://www.kanzaki.com/mus  
ic/lvb-sym9f.html

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7675f/>

---

まっさんが幻想入りシリーズ～鈍感咲夜とプリズムリバーとクリスマス。～

2010年10月28日04時32分発行